訃報：

中村廣治郎先生のご逝去を偲ぶ

菊地　達也

2023年12月5日，中村廣治郎先生が87歳で永眠された。イスラム学研究室初代主任である中村先生のこれまでのご研究を振り返ることは，この研究室の歴史のみならず日本におけるイスラム思想研究の最初期の歩みを語ることでもある。創設当初の研究室で学んだ名だたる諸先輩を差し置いて私がそれを語るのは畏れ多いことではあるが，学部時代から博士課程に至るまで中村先生の指導を受け，先生が創り上げたイスラム学研究室に専任教員として現在在籍する者として，僭越ながら先生の事績を回顧したい。

1936年に福岡県で生を受けた中村先生は1956年に東京大学教養学部文科二類に入学し，文学部宗教学宗教史学科に進学すると，1960年にはそのまま同大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程に進まれた。[1] 卒業論文と修士論文の題目はそれぞれ「呪術と宗教に関するマリノフスキーの理論」，「トルコの宗教改革運動――ジヤ・ゲカルプとケマル・アタチュルク――」である。この時期に宗教学上の理論から中東やイスラム教といった個別事象へと研究対象が移行しているが，宗教学的理論の探究とイスラム教の思想研究は，時期によって力点の置かれ方が違うものの，先生のその後の長い研究生活における二つの柱となる。また，このように研究対象が変わったのには，「某先生から『イスラム研究をやってみないか。君なら馬力があるからできる』といわれ，『説得』された」[2]という背景がある。出発点はイスラム教やイスラム教徒との運命的な出会いではなく，教官による「説得」ではあったが，その後中村先生は，持ち前の「馬力」でアラビア語を独学しながら博士課程で学ぶことになる。

1965年，中村先生はハーバード大学大学院近東言語文学科に留学し，北米を代表する宗教学者でありイスラム教研究者でもあるウィルフレッド・キャントウェル・スミス（1916〜2000）に師事した。中村先生がガザーリー研究を志したのはこの時期であり，留学3年目のサマー・スクールでガザーリーの自伝『誤りから救うもの』アラビア語原文を読み，「回心体験を頂点とする宗教的求道者としてのそのドラマティックな生き方に惹かれ，彼の思想がそのような生き方ときわめて明確に相関的に理解できるように思われた」[3]ことが直接的なきっかけとなり博士論文での研究対象をガザーリーにしたという。1970年には“Al-Ghazālī’s Idea of Prayer, with an

---

[1] 中村先生の足跡と業績についての基本情報は，中村廣治郎「イスラム学・宗学研究の歩み」（中村廣治郎先生制作，2007年），1–14頁に依拠する。
[2] 中村廣治郎「宗教学からみたイスラム研究」『宗教研究』341号，2004年，222頁.
[3] 中村廣治郎『ガザーリーの祈禱論――イスラム神秘主義における修行』（大明堂，1982年），ii.

English Translation and Annotations of ‘Kiāb al-Adhkār wa’l-Da‘awāt’ of His *Iḥyā’ ‘Ulūm al-Dīn*’[4]により博士号が授与された。精密な原典翻訳を含むこの学位論文は，東京大学大学院時代から弛まず続けてきたアラビア語学習とイスラム思想研究の結晶であると同時に，その後長年に渡って続く先生のガザーリー研究の出発点でもあった。そして，帰国早々の 1971 年には東京大学東洋文化研究所専任講師として採用された（翌年には助教授昇任）。

中村先生にとって大きな転機となったのが，1982 年における東京大学文学部助教授への配置換えであった。中村先生は，この年同学部に新設されたイスラム学専修課程の主任として招かれたのだが，研究所勤務だったこれまでとは違い，これ以降は教育と研究室運営に多大な労力を割かなければならなくなる。イスラム学研究室は，いわゆる「イスラム世界」がこれまで主に非宗教的な視点で研究されてきたわが国の現状に鑑み，従来欠けていた「イスラム思想・宗教・文化の研究に重点」を置き，イスラム教の「思想・宗教・文化・法・社会などを総合的かつ有機的に研究・教育する」国内唯一の機関として発足した。[5] 他の専任教官は助手として招かれた鎌田繁先生のみであり，教授を頂点とする講座制が基本的な枠組みであった時代に，助教授であった中村先生が，これまで国内には存在しなかった分野の研究・教育体制を新たに創り上げるまでには並々ならぬご苦労があったことであろう。

このような産みの苦しみは新設の研究機関には往々にしてあることではあろうが，中村先生は他領域の新設研究室ならばおそらくは対峙しないであろう困難にも直面していた。それは井筒俊彦先生（1914～1993）の存在である。日本国内では比較思想の大家としても知られていた井筒先生は，欧米や中東ではクルアーン研究などを通じて高い知名度を持つ世界的なイスラム学者であった。[6] イスラム学研究室が設立された時期，井筒先生の他にイスラム思想研究者と言えるのは，中村先生，鎌田先生といった東京大学文学部宗教学宗教史学研究室出身者および井筒門下の数名程度であり，まだ若手研究者である彼らの知名度，実績は井筒先生に遠く及ばなかった。中村先生はほとんど何もない状態から新たな研究環境を生み出すだけではなく，井筒先生のそれとは違うイスラム研究のあり方を示す必要もあったのである。

イスラム学研究室着任後の中村先生は，博士論文執筆時以降追ってきたガザーリーについて数々の学術論文と翻訳を発表した。[7] 中村先生の中心的な業績であるガザーリー研究は，学術

---

[4] 流沙海西奨学会受賞作（1970 年）。後に刊行された著書『ガザーリーの祈禱論――イスラム神秘主義における修行』，*Ghazali and Prayer*, Kuala Lumpur: Islamic Book Trust, 2001（1975 年日本宗教学会賞受賞作）および翻訳書 *Ghazali on Prayer*, Tokyo: Institute of Oriental Culture, 1973（1990 年に *Invocations & Supplications: Kitāb al-Adhkār wa’l-Da‘awāt: Book IX of the Revival of the Religious Sciences: Iḥyā’ ‘Ulūm al-Dīn*, Cambridge: Islamic Texts Society として改訂版）はこの博士論文を元にしている。

[5] 中村廣治郎「宗教学からみたイスラム研究」，221 頁.

[6] 鎌田繁「「東洋哲学」とイスラーム研究」澤井義次・鎌田繁編『井筒俊彦の東洋哲学』（慶應義塾大学出版会，2018 年），12 頁．なお，中村先生は井筒先生から直接教えを受けたことはなく，井筒先生と対面したのは慶應義塾大学で開催された S. H. ナスル先生講演会の際の一度きりであった（中村廣治郎「私の井筒俊彦先生」『井筒俊彦全集 月報』1，2013 年，7）。

[7] ガザーリーの神学，哲学，神秘主義などについて執筆された論文は，その後『イスラムの宗教思想――ガザーリーとその周辺』（岩波書店，1982 年）としてまとめられたが，本書には収録されなかったシーア派批判に関する論文なども含めた中村廣治郎著作集の刊行が予定されている（2024 年 8 月時

的な翻訳を踏まえた堅実な文献学的研究であり，宗教学などの理論の応用にも禁欲的だったこれらの研究は，クルアーン理解に言語学的な意味論を導入したり異なる文化圏の神秘哲学を大胆に比較した井筒先生とは一線を画していた。

中村先生の宗教学者としての一面がより表出し，同時に中村先生が考えるこれからのイスラム研究像が窺える著作は，概説書『イスラム――思想と歴史』（東京大学出版会，1977 年）であろう。本書はこれまで主流であった「『外』から実証的にイスラム教を語る歴史学的アプローチ」ではなく，「内側からの視点をも何とか活かせないかと考えて」[8]イスラム共同体（ウンマ）思想に注目した，すなわち宗教学的な内在的理解をイスラム教において実現しようとした著作でもある。本書を構成する章はそれぞれ聖典（コーラン），預言者，共同体，「異端」（ハワーリジュ派とシーア派），聖法，神学，政治，神秘主義，近代思想を主題にしている。イスラム教の諸思想に関する概説書で共同体に一章が割かれるのは珍しいが，そこには，共同体論を挟み込むことでイスラム教の宗教文化をより総合的に理解できるのではないかという狙いに加えて，これを突破口にして宗教学的にイスラム教を把握したいという意図が垣間見えるだろう。また，聖法，政治，近代思想といった，（おそらくその重要性は認識していたであろうが）井筒先生がほとんど関心を示さなかった領域がクローズアップされている点も注目に値する。他の宗教文化圏にも通底するようなイスラム神秘哲学の深層に潜り込むのではなく，神秘主義のみならず思想文化圏内で圧倒的な影響力を持つ法学なども含めて，総合的，多角的にイスラム教をとらえようとする宗教学者，そして教育者としての中村先生の指針がそこには見出されるだろう。

中村先生は授業や指導においても総合的なイスラム教理解をしばしば強調されていたように記憶しているが，ガザーリーを研究していたことはこのような教育指針にとって好都合であったと思われる。ガザーリーは神学者，神秘主義者，法学者であり，哲学とシーア派思想にとっては痛烈な批判者であり，現代思想においてもしばしば参照される思想家である。ガザーリー思想を多角的に研究することは，イスラム思想文化内の様々な領域に触れ，それらを理解することをも要求する。[9] ハーバード時代にガザーリーを研究対象として選んだ際に将来の教育方針まで考えて選択したのか，今となっては不明であるが，イスラム教の多種多様な学問領域を専門とする研究者をこれから育成しようという研究・教育機関の最初の長に中村先生が選出されたことは，この点でも僥倖であったと言えよう。

1982 年のイスラム学研究室主任就任以来，研究室運営や学会などでの仕事を抱えながらも，

点）。翻訳については『中庸の神学――中世イスラームの神学・哲学・神秘主義』（東洋文庫 844，平凡社，2013 年），『哲学者の自己矛盾――イスラームの哲学批判』（東洋文庫 867，平凡社，2015 年）にまとめられた。

[8] 中村廣治郎『イスラム教入門』（岩波書店，1998 年），223 頁.

[9] 中村先生のガザーリー研究は神学および神秘主義に力点があったが，その他の側面についても研究業績はあり，その延長上に 1980 年代における神秘主義，法学，哲学に関する概説書の翻訳，R. A. ニコルソン『イスラムの神秘主義――スーフィズム入門』（東京新聞出版局，1980 年），アブドル=ワッハーブ・ハッラーフ『イスラムの法――法源と理論』（東京大学出版会，1984 年），O. リーマン『イスラム哲学への扉――理性と啓示をめぐって』（筑摩書房，1988 年）がある。

中村先生は主にガザーリー思想に関する学術論文と，後進育成および一般社会におけるイスラム教理解の促進を意図した翻訳と概説を多数執筆してきた。ガザーリーはイスラム圏を代表する大思想家であり，研究者人生のすべてを捧げてもおかしくない研究対象である。しかし，定年退官を間近に控えた 1990 年代中頃より，中村先生は現代イスラム思想を新たな研究対象とするようになる。私は当時博士課程に在籍していたが，例年原典講読の演習ではガザーリーを読んでいた先生が急に，アルジェリア出身の現代イスラム思想家アルクーン（2010 年没）のテクストを講読する，と仰ったときには唖然呆然とした記憶がある。1996 年以降エジプトのアシュマーウィー（2013 年没）に関する複数の論文を発表し，桜美林大学に異動した 1997 年には，『イスラームと近代』においてパキスタン出身のラフマン（1988 年没），アルクーンらとともにアシュマーウィーの思想をネオ=モダニズムの思想と規定し，現代イスラム思想の類型論の中に位置づけた。

中村先生が現代イスラム思想，なかでもネオ=モダニズムに注目するようになった理由は当時の研究環境に求められる。1990 年代の日本では地域研究という枠組みのなかで，中東などにおいて進行していた「イスラーム復興」現象と政治思想としての「イスラーム主義」に大いに注目が集まっていた。中村先生は中東地域研究者の間でイスラム教の「ユニークさや独自性のみが強調され」「健全な意味での批判的な視点が欠落し，護教的言説のみが声高に主張される」傾向を問題視したのだが[10]，ここでいう「護教的言説」とは，「イスラーム復興」や「イスラーム主義」の当事者が唱える本来のイスラム教のあり方を自らの前提にしてしまい，基本的に彼らの主張を肯定的に受容するような議論を含意する。中村先生は，彼らが注目する「イスラーム復興」「イスラーム主義」とは違う形態をとり，本来のイスラム教を違う形で設定するイスラム思想が同時代に存在することを示し，前者のみが特権的位置を占めるものではないと示そうとしたのだろう。

2000 年代に入ってからの中村先生には，宗教学という原点への回帰という傾向が目立つようになるが，これもまた 1990 年代以降の中東地域研究に対する問題意識の延長上にとらえることができるだろう。実際，その端緒となる論文「宗教学からみたイスラム研究」では 7 割近い頁数が「イスラーム復興」「イスラーム主義」言説の代表者である小杉泰先生への批判に割かれている。当時流布していた「イスラームは単なる宗教ではない」といった言説は，イスラム教は「私たちが慣れ親しんでいる宗教」とは違うというイスラム教独自論につながり，「神学・神秘主義といった『宗教的』部分以外に，イスラムには社会的政治的に重要な部分があり，『宗教』とは無関係にそれを研究していても，それはイスラム研究であるとして通用する」[11]という状況が，小杉先生個人に限らず，1997 年に始動した「イスラーム地域研究」プロジェクト以降，日本における中東地域研究に散見されるようになったのである。

「『宗教』とは無関係に」イスラム教が語られることが多くなった 2000 年代以降，中村先生が問おうとしたのは，日本人中東地域研究者の都合で生まれた「イスラームは単なる宗教ではな

---

[10] 中村廣治郎『イスラームと近代』（岩波書店，1997 年），7 頁.
[11] 中村廣治郎「宗教学からみたイスラム研究」，228 頁.

い」といった言説を離れ，非イスラム教徒の日本人研究者が「宗教」としてのイスラム教をどのようにとらえ直すことができるのかという問題であった。この問いに答えるためのツールとなったのが宗教学の理論や方法論であり，ガザーリーなどの文献学的研究ではあまり使われなかった宗教学の概念が多用され，文献学を離れて歴史上存在したイスラム思想を大づかみにとらえるための類型論が語られるようになる。(12)

中村先生の研究対象は時代によってかなり異なっているが，少なくともハーバード留学時代以降の研究の変遷は「変化」というよりは「発展」の結果であったと言えるだろう。古典期の文献学的研究がなければ中東地域研究批判と現代イスラム思想研究には行き着かなかったであろうし，2000 年代以降に理論や類型論の適用対象となったのは，それまでに研究してきた古典イスラム思想や現代イスラム思想であった。問題設定は時期によって変化していても研究自体に断絶はない。

これまで述べた通り，中村先生はガザーリー研究，現代イスラム思想研究，宗教学と多方面にわたり多大な貢献を果たしており，いずれそれぞれの領域において専門家によりその業績は評価されることになるだろう。本稿では最後に，イスラム学研究室，そして日本におけるイスラム思想研究にとって中村先生がどのような存在だったのかについて述べておきたい。これを端的に示すものが『イスラム——思想と歴史』の新装版（2012 年）の参考文献である。中村先生は 1977 年版の改訂にあたり参考文献を大幅に補充しており，そこにはイスラム学研究室出身者である東長靖（スーフィズム），飯塚正人（現代イスラム思想），堀井聡江（法学），菊地達也（シーア派思想），青柳かおる（神学），大川玲子（コーラン）の著書が追加された（括弧内は専門領域）。中田考（法学，現代イスラム思想），小林春夫（哲学），松永泰行（シーア派思想，現代イラン政治），仁子寿晴（哲学），吉田京子（シーア派思想），青木健（ゾロアスター教思想），池内恵（現代イスラム思想），西野正巳（現代イスラム思想）など，この時点でまとまった単著がなかった，専門分野と本書の章構成が適合しなかった，といった理由のために名前が挙げられなかったと思われる研究室出身者もいる。(13) この参考文献リストは，

---

(12) このような特徴を典型的に示す論文が，2007 年の桜美林大学での最終講義などをもとにした「イスラム研究とインサイダー／アウトサイダーの問題」『国際学レビュー』19 号，2008 年であり，前半部は様々な宗教学者たちが創り上げた理論をどのようにイスラム思想に適用するのかが語られ，後半部ではアウトサイダーがイスラム教を理解するための助けとなるよう，歴史上存在した様々なイスラム思想をどのような根拠でどのように分類するかが論じられている。また，学術的でありながら読みやすい中村先生の翻訳には定評があり，シャイフ・ハーレド・ベントゥネス『スーフィズム——イスラムの心』（岩波書店，2007 年），ウィルフレッド・キャントウェル・スミス『世界神学をめざして——信仰と宗教学の対話』（明石書店，2020 年）など，現代イスラム思想や宗教学に関わる翻訳書もある。

(13) 宗教学宗教史学研究室に所属しながらイスラム教を研究していた学生に対しても中村先生は手厚くサポートしていたようであり，彼らにも中村先生の研究は大いに影響を与えている。そのような立場にあった塩尻和子先生，八木久美子先生は中村先生の支援と助言に対して感謝の言葉を捧げている（塩尻和子『イスラームの倫理：アブドゥル・ジャッバール研究』（未来社，2001 年），318–319 頁および八木久美子教授最終講義「宗教学とイスラムを学ぶこと」2024 年 3 月 9 日，東京外国語大学）。

1982 年から 1997 年までの在任期間の間に中村先生が多くのイスラム思想研究者を養成したこと，そしてその研究分野が多岐にわたることの証左であろう。これほど多くの分野にまたがって後進が育ったのは，中村先生が（おそらくはかなりの無理をして）本来の専門を超えた領域についても教育・執筆活動を広げてくれたからでもある。1990 年代以降，イスラム学研究室出身者は日本におけるイスラム思想研究において中心的な役割を果たしてきたので，中村先生が初代主任でなかった並行世界においてイスラム学研究室と日本のイスラム研究がどうなっていたのか，今となってはまったく想像できない。宗教学的方法論が義務づけられていたわけではないため，中村先生が自らの軸とした宗教学の理論と方法をどの程度活用しているかは人によってかなりの濃淡があるが，先生がガザーリー研究のなかで示してくれた，テクスト読解に基づいた文献学的な思想史研究は，日本のイスラム思想研究に確実に根付いている。

中村先生，先生がおひとりで抱えていたことを，私たちそれぞれが単独で実践することは到底不可能でしょう。しかし，おひとりで出立するしかなかった先生とは違い，私たちには幸いにも先生のもとで研鑽を積んだ先輩や後輩がいます。ひとりでは無理でも先生のもとで学んだ者みなで，先生から受け継いだものを必ず次の世代に引き渡していきます。中村先生，本当にありがとうございました。

東京大学大学院人文社会系研究科教授／
Professor, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo